

フランスの暗唱指導

— 小学校のばあい —

中西一弘

暗唱指導。このことばはなにか昔の、非難されるべき伝統を、わたしたちに想起させがちである。古い伝統を維持している国々にあつては、いつも学習者の歎息を伴ないつつ引き継がれてきた、という印象をぬぐうことができないであろう。はやく、モンテーニュ

も、「暗記することは知ることではない。」と断言している。詰込主義教育の主流を占めてきた、暗記学習の弊害を、この「暗唱」指導に感じ取るのも無理はない。しかし、暗記すること、記憶力を鍛えること、記憶したものを音声化して表現すること、これらの能力は児童にとって不要なものであるか。この場合、わたしたちは漢文素読の学習法をまず思い起こすであろう。それに、戦前までの暗唱指導の数々を。漢文素読の方法をそのまま再現することは問題外としても、暗唱学習は考慮に値しないであろうか。暗唱指導は、いわゆる詰込主義に陥らざるをえないものであろうか。

以上のような疑問と問題を持つのであるが、フランスの暗唱指導では、これらの点をどのように解決して、実践にうつしているであ

ろうか、をみていきたい。最初に一挙に暗唱指導の実態を把握してもらうために、その具体的な指導の姿を紹介することにする。つぎに掲げるのは、師範学校の教科教育用教科書として編集されたものうち、暗唱指導を論述し、その具体例を示した部分を訳出したものである。暗唱指導の教材研究の一例である。

ヴェルレーヌの「沈む日」は中級第二学年（日本の小学五年）か、上級（小学六年）にふさわしい教材であろう。

沈む日

たよりないうす明かり

沈む日の

メランコリヤを

野にそそぐ。

メランコリヤの

歌ゆるく

沈む日に

われを忘れる

わがころ

うちゆする。

砂浜に

沈む日もさながらの

不可思議の夢

紅い幽霊となり

絶えまなくうちつづく

うちつづく

大いなる沈む日に似て

砂浜に。

(堀口大学氏の訳による。)

この詩では、

うす明かり メランコリヤを そそぐ。

メランコリヤの わがころ うちゆする。

不可思議の夢 絶えまなく うちつづく。

をおさえなくてはならない。

この三つのテーマは、冒頭からはっきりとさせておこう。ちょうど、その上に刺繡する横糸のように。あとで、子供たちはこの導きの糸によって、いつも、記憶の道筋を見出すであろう。その場合の

児童の心の動きは、詩人のそれと全く同一であろう。したがって、この詩の重要語が、「うす明かり」・「メランコリヤ」・「夢」の

三つであることを示す。「うす明かり」(ここで、白らんだ光を理

解させねばならない。)は、野に満ちていて、詩人の心に「メランコリヤ」を吹き込む。そして、かれは、眼前にうちつづく「夢」の

中にわれを忘れているのである。

つぎに、横糸の上に細部を置きながら、もう一度それぞれの部分を検討する。

「たよりないうす明かり」——この二語を固く結合させよう。白く、柔らかな、弱い光であり、すべては静かであることを強調する。

(これは、同義語でもなく、根拠のない発展でもない。詩句とその音楽からひきおこされる、^{アトモスフィア}諧調の調べである。)

たよりないうす明かり——メランコリヤを——野にそそぐ……

この白く柔らかな光は空より来て、野の広い空間にあふれる。そして、「メランコリヤを」——詩人の心の中と同様に——「野にそそぐ」。「メランコリヤを」「野にそそぐ」、この二行を繰り返して

言わせる。ついで、第一行をこれに加える。そのとき、脚韻 *allantando* *le-melancolie* がどんなにメランコリックなものであるかを強調する。

「沈む日のメランコリヤ」(この詩の中心語句を反復することを恐れてはならない。)これは夕方ではない。しかしながら、一日の終りの日没時と同様なメランコリックな印象を受ける。

以上の四行を反復させよう。児童がこの四行をよく理解し、すでに熟知していて、上手に朗読できることが認められるであろう。

同じ方法でつぎの四行を続ける。それが、だいたい理解されたなら、前の四行とあわせて朗読させよう。このようにして、作品全体に進む。詩は説明されていき、漸次再構成されながら、その全体の意味をあらわしてくる。最後に——そして、すばやく、骨を折らず

に——ほとんど全部の生徒が、この詩を暗唱するであろう。目印になる語句「うす明かり・メランコリヤ・夢」に支えられて。これら

の語句のまわりには、連続的につぎのテーマが形成されていく。「うす明かり、メランコリヤを、そそぐ」——「メランコリヤわがこころ、うちゆする」——「不可思議の夢、絶えまなく、うちつつく」。さらに、これらのテーマの一つについて、だんだんとつぎの詩句全体が結晶されていく。

たよりのないうす明かり

沈む日の

メランコリヤを

野にそそぐ。

ことが欠けていたり、他のことばになつたりすることもあろう。そのときは、詩句が破格になっていることを示す。それ以上に、その破格を耳から理解させる絶好の機会である。さらに、意味も変化していることを明らかにしよう。また、詩人なことばが、いかにすばらしく、適切で美しいか、を示す機会でもある。家庭では、児童たちは、かれらの心の中で歌っている作品を定着させるだけでよいのである。こうなれば、たんなる復習にすぎないであらう。

ここには、児童に朗唱させる以前の指導として、いかに記憶させるか、の方法が示されている。ここにみられるように、頭からの詰込みでは決してない。作品全体の構成にしたがい、その全体の要点を端的に示し、ついで、各部分の中心語をおさえ、中心語に付加する語を調べつつ、イメージの理解と形成とをはかり、加えて、諧調・脚韻を確かめ感じ取らせながら、記憶させようと配慮されているのである。作品の理解・鑑賞と記憶化・再現化の二つを有機的にね

らったものであると考えられる。教室では作品の徹底的な分析はおこなわないが、教師自身は前もって分析し、その成果にもとづき、児童の作品理解とその再現化に有効な手がかりを与える努力が払われている。作品の構造に準拠し、詩情の展開に応じて指導されているのが、この場合の特色であると思われる。

实例にみたように、フランスの暗唱指導は、作品の理解——おおよその理解ではあるが——と、それに加えて、記憶するための着眼と再現の目やすとを与えるなどの配慮がみられ、たんなる暗記学習でないことが知られるのである。暗唱指導は、しかし、以上ですべてが終了ではない。記憶化は暗唱指導の半ばにすぎない。重要な学習がまだ残されている。暗記し、記憶に定着した作品を、正確・明瞭な発音で、表現的に朗唱する学習が残されている。暗記が理解・受容とすれば、これは発表・表現といえよう。読み方・語彙・文法などの学習を含め、フランスの国語教育では、その全領域の学習が、理解にとどまらず、表現化することを目標としている。暗唱指導もまた音声の表現による仕上げを目標としている。指導要領の規定にそれが明記されているのである。

つぎに、指導要領・プログラム・インストラクション 訓 令 によって、暗唱指導の輪郭をたどることにする。注3

二

準備級（小学一年に相当）

精選された、簡単にやさしい詩の学習（毎日10分授業一回）

初級（小学二・三年に相当）

きわめてやさしい詩の表現的な暗唱（毎日15分授業一回）

中級・上級（小四・五・六・中一に相当）

有名な文学作品から抜萃した詩ならびに散文の表現的な暗唱
(毎日15分授業一回) ^{註4}
完成級(中二・三に相当)

フランス語のもっとも美しい作品から選出したテキスト。文学
趣味への導入、ならびに、すぐれた作家に関する知識の習得に役
立つもの。

以上が指導要領に定める暗唱指導の項目である。暗唱指導の骨子
だけが表示されていて、こまかな規定はみられない。一回の授業で学
習させる教材の分量についても特に触れていないが、各種の実践的
指導書に記載されているところによると、つぎのようである。 ^{註5}
準備級(8~10行)、初級(10~15行)、中級(15~20行)、上級
以上(20行以上)。

指導要領には、いつも「アンストリユクシヨ 訓令」が加えられていて、各学級
での暗唱指導について、具体的な指示がみられる。指導全般に関す
る注意事項が述べられているので、ここにあわせ掲げることにする。

訓令(一九二三年)

暗唱学習の重要性は準備級からすでに認められている。学校訪問
の際、教師の机の近くの掲示板上に、その学年中に学ぶ暗唱作品のリ
ストが規則どおりに張られているのに注目させられる。しかし、そ
のリストが全て果たされることはまれである。それにもかかわら
ず、暗唱学習は、国語の正しい使用法とその表記法を子供たちに学
ばせるのに最もすぐれた方法の一つである。そのうえ、暗唱教材の長
さと性質とが児童の年齢に適合しているならば、暗唱学習は児童に

とって快いものとなるという利点をもっている。準備級では短い詩
を耳から学ばせるが、アルファベツトシヨ 明瞭な発音と正確な朗読を求める。初
級以後では、読み方教材の中からすこし長い詩を選んで学習する。
中級になると、児童の記憶が韻律によって助けられる必要がすくな
くなるので、指導要領には、詩にあわせて散文の作品が組まれてい
る。どの学級においても、はっきりと価値の定まった作品のみを選
んで児童に記憶させるようにしよう。しかしながら、九歳の児童用
テキストを全部古典作品から借用することは困難であろう。ラ・ホ
ンテーヌでさえも、児童にとつては、いつも魅力あり、理解可能な
ものとはかぎらないのだから。

訓令(一九三八年)

完成級では、中級と同様に、読み方、暗唱、朗読の学習をおし
て、児童にこの学習のむずかしさを自覚させ、克服していくように
導く。耳でとらえることを学ばせ、ついで、発音の仕方によつて
は、語句が「破格の」ものになりうることを、すなわち、韻律を失な
うことを児童に感じ取らせよう。ふつうには発音しないシラブルで、
詩において発音しなければならぬシラブルには、とくに明瞭
な発音となるよう注意せねばならない。シラブルを規則正しい数に
整えるのは必要な連続に注意せねばならない。

詩作品には十分な事前の準備がなされねばならない。この準備は
散文作品に対すると同様に語句の解説をするのであるが、それ以上
に、とくに語句の韻律と諧調の解説をおこなおう。児童は詩句の統
辞の構造を破壊することなく、¹²音綴詩の12シラブルを発音す
ることや律動アクセントをもつシラブルを強調し、感情アクセント

をもつ母音に抑揚をつけることなどを学ぶであろう。児童はまず教師が朗読するのを聞く。ついで彼ら自身が教師の指導のもとに一人ずつ読んでいく。詩句の韻律を感じ得し再生するのに必要なだけ繰り返し返して読む。反復はすこしずつ律動と諧調の感覚を生み出すであろう。この学習においてやさしい詩を児童に提示することから始めよう。すなわち、律動のはっきりした詩から始める。半分ずつか、もしくは、四つの部分に区分されている12音綴の一連の詩句を読むことは、その律動が非常にはっきりして、脚韻が長ければ児童にとっては容易なことであろう。これらの詩につづいて、それほど律動が明確でない詩を暗唱させ、漸次ラ・ホンテヌのいっそう巧妙な詩にいたらせることができる。最初から複雑な律動と音響性をもった不規則な詩を朗唱させることは教育的な過ちの一つである。ある教師たちは、最初に意味の上からみて「やさしい」作品を捜すこととがしばしばである。ここで段階づけようとしている困難さは、とくにその種のものではない。中級や上級第一学年において、律動の学習を始めるのに好適なラ・ホンテヌの寓話は、その主題によって「やさしい」のではなく、それらの一連の詩句が容易に捉えうる律動をもっているからなのである。例えば、寓話「牝獅子の葬式」は12と8の音綴^{シラブル}だけで構成されているが、それは、子供たちがかなり容易にその律動を感じ取り、再生することのできる寓話の一つである。

一九二三年の訓令は、確固とした文学的価値をもつ作品のみを暗記させるよう、正しく規定している。児童の知的年齢をこえるものでも、力強い感情や普遍的なイデー——それらは詩そのものである——が、やさしい日常的な用語で表現されているような作品であれば、教材に選ぶことができるし、障害もない。もし子供たちが、聞

いたり、朗読したり、暗唱したりする詩句の律動と諧調とを感じる事ができるなら、言語的・文学的注釈は多くのばい余計なものとなる。好響性と重要語句とによって、児童は詩的な思想・感情を直観的にとらえるであろう。読解学習がもつとのちになつて、彼らの感動の無意識的要素をあきらかにする役になうのである。

第二学年においては、さらにむずかしい詩を取り扱おうである。しかし、指導要領は、それ以上に朗読法の細部にまで解説を与えうる。律動や韻律の理論的な学習をすることなく、詩句はその性質上大きな声で発音されなくてはならないし、各行の詩句は一定数のシラブルが聞こえるようにしなくてはならず、その数は語句の綴字法や日常の発音と常に一致するとはかぎらないことを示そう。もしだれかがあるシラブルを省略したら、その詩句は「韻をふまない、破格の」詩となることを、児童自身わかるようにさせよう。教師は、散文では自由であるが、詩句においては律動を保つために先行する母音を発音する必要上引きおこされる連読^{リテラ}について、とくに生徒の注意を喚起しよう。このようにして、生徒は、彼らの記憶の中で鳴り響いている詩句の具体的な例によって、つぎのことを理解するようになる。すなわち、各行の最後をしるす脚韻は、耳にとつていつも必要な一つの予告であり、各行の内的な律動がいっそう複雑になり、一段と捉えにくい場合は、ますます不可欠のものとなることを理解するであろう。

暗唱指導の全域にわたって、具体的に述べられている。暗唱指導の重要性和その意義、児童の興味、各学級ごとの指導、教材の選定、

指導上の留意点など。しかし、それらの諸点をとおして共通に見出せる暗唱指導の力点は、表現学習ということであろう。作品の記憶という観点よりも、作品の音声による理解から表現化に最大の関心が払われていることが、訓令の文章から読み取れるのである。律動と諧調に幾度となく触れ、明瞭な発音や朗読法に指導の重点が置かれていることからも明らかであろう。児童は、耳から韻律を捉え、目で詩句の構成を理解し、口で再現していく。暗唱を、暗記と朗唱とに分けるとすると、朗唱に大きな比重がかけられているといえよう。これは、指導要領の初級・中級の項が、「表現的な暗唱」となっているのと一致するのである。もちろん、作品の暗記なしには、「朗唱」は問題外なのであるが。

指導の実際については、

準備級 では、短い詩を耳から学ばせる（すなわち、テキストなしで、教師の朗読を聞きながら暗記・復唱するのである。この学級ではまだ十分に文字を読みこなすことができない。筆者注）が、明瞭な発音と正確な朗読とを求める。

初級 からは、読み方のテキストから、すこし長い詩を選んで学習する。（テキストにもとづく学習を開始する。筆者注）。

中級 になると、詩にあわせて散文の作品（その比率は詩が3とすれば散文は1。）。

と規定して、指導要領の解説・具体化をはかっている。

しかし、ここで、なぜ詩を暗唱学習の主要教材とするのであろうか、の疑問が生じる。訓令に「中級になると、児童の記憶が韻律によって助けられる必要がすくなくなるので……」とあり、詩のもつ韻律がとくに低学年の児童の記憶化を助けることがわかるが、それ

以後においても詩は依然として主要な教材なのである。それはいかなる理由によるのであろうか。また、どのような詩が暗唱指導の教材として活用されているのだろうか。そのねらいはどこにあるのだろうか。これらの問題をつぎに考察していくことにする。

三

ルテリエ氏の「指導要領・訓令・年間計画表」^{注6}によって、初級第一学年、中級第一学年、上級の三学年で学習予定となっている作品名を掲げる。かつこ内は作者名である。「学校訪問の際、教師の机近くの掲示板上に、その学年中に学ぶ暗唱作品のリストが規則どおり張りつけられている」（訓令）、そのリストの一例である。

初級第一学年

- 1、郵便配達人（スピー）
- 2、狐とぶどう（ラ・ホンテース）
- 3、私は優しい思い出を持っている（シャトープリアン）
- 4、ひばり（ヤール）
- 5、ひなぎく（レベーク）
- 6、食べもの（デュアメル）
- 7、私のよい馬（エカール）
- 8、少女の枕（ヴァルモール）
- 9、狐と鶴（ラ・ホンテース）
- 10、鳩とあり（ラ・ホンテース）
- 11、獅子と鼠（ラ・ホンテース）
- 12、獅子とぶよ（ラ・ホンテース）
- 13、秋（ドラリュ・マルドリユ）

- 14、大鯉と小鯉（フロリアン）
- 15、母（ユーゴー）
- 16、水の歌（ヴェルハーレン）
- 17、驟雨のあと（ゲラン）
- 18、私の美しい村（パターユ）
- 19、田舎のお祭（オベール）
- 20、小さな家（ヴァイルドラック）
- 21、小さな子供たちに（ドデー）
- 22、釣りをする人（レイ）
- 23、秋（ラマルチヌ）
- 24、揺りかごの子供（ユトゴー）
- 25、溝（ユーゴー）

中級第一学年

- 1、紡ぎ車の歌（ルコン・ド・リール）
- 2、愛と蜜蜂（ロンサール）
- 3、貧乏な子供（ロスタン）
- 4、幸福（フォール）
- 5、追悼の歌（祖国のために死んだ人々に）（ユーゴー）
- 6、私は優しいロバを愛した……（ジャム）
- 7、世界で最も美しい国（レベーク）
- 8、都会の鼠と田舎の鼠（ラ・ホンテーヌ）
- 9、狼と犬（ラ・ホンテーヌ）
- 10、樞と葦（ラ・ホンテーヌ）
- 11、鼠の会議（ラ・ホンテーヌ）

- 12、兎と亀（ラ・ホンテーヌ）
- 13、お嬢さん（ゴージェ）
- 14、親子の愛情（パストゥール）
- 15、聖ヴァランタン（アンジェリエ）
- 16、春の朝（ノアーユ）
- 17、雨が降る……（グレ）
- 18、二人の姉妹（ユーゴー）
- 19、スガンさんの山羊（拔萃）（ドデー）
- 20、蛙（サマン）
- 21、故郷（ノアーユ）
- 22、老いた貧乏人（ロリナ）
- 23、戦のあと（ユーゴー）
- 24、フランク人（シャトープリアン）
- 25、十月（ヴェルハーレン）

上級

- 1、時はその外套を残していった……（シャルル・ドルレアン）
- 2、故郷（デュ・ベレー）
- 3、ル・シッド（コルネユ）
- 4、牡獅子の葬式（ラ・ホンテーヌ）
- 5、鷺のまねをした鳥（ラ・ホンテーヌ）
- 6、ジュノンに訴えた孔雀（ラ・ホンテーヌ）
- 7、ルイ十四世の恋歌（セヴィニエ夫人）
- 8、守銭奴（モリエール）
- 9、婿選び（町人貴族より）（モリエール）

- 10、もし私が金持であつたなら…… (ルソ)
- 11、サアディのバラ (ヴァルモール)
- 12、秋 (ラマルチーヌ)
- 13、故郷、ミリー (ラマルチーヌ)
- 14、角笛 (ヴィニー)
- 15、夕べの星 (ミュッセ)
- 16、貧乏な人々 (ユーゴー)
- 17、オセア、ノックス (ユーゴー)
- 18、田園の生活 (ユーゴー)
- 19、市場 (サマン)
- 20、征服者 (エレディア)
- 21、諸国民の中のフランス (ミシュレ)
- 22、真昼 (ルコン・ド・リール)
- 23、わが家の周囲 (ヴェルハーレン)
- 24、無鉄砲な人々 (プリュドム)
- 25、ジャンヌ・ダルクのムウーズへの別れ (ペギー)

「どの学級においても、はつきりと価値の定まった作品のみを選んで児童に記憶させるようにしよう。」という「訓令」の精神に即して決定された計画表である。ここには児童詩の類は見出せない。すべて成人のために書かれた作品のみである。しかも一流文学者の傑作のなかから選出されたものばかりである。「暗唱教材の選択は、フランス文学の最上の作品に限られねばならない。内容・形式において子供っぽく、平凡なものを含む作品は徹底的に避けねばならない。」とは、かつての視学官オヴァン氏のことばである。児童の作

品、児童向けに作られた作品は、ここでは全く問題外とされている。ラ・ホントレーヌ、ユーゴー、ラマルチーヌ、ヴェルハーレン、ルコン・ド・リール、ロンサルなどの詩、ドーデー、シャトープリアン、ルソ、セヴィニエ夫人、ミシュレなどの文章、これらは、いずれも、フランス文学の一流作家の傑作である。問題は、それらの傑作がはたして児童に理解されるであろうか、である。

オヴァン氏は、「児童が、読みかつ暗記している作品を完全に理解することは必要なことではない。教養あるわれわれ成人が、読み馴れた作品においても、その意味をいつもすべて明確な形で認知しているとはかぎるまい。ラ・ホントレーヌの寓話の一つをとっても、そのすべてのニュアンスまで理解しているとうぬべれることのできる教師がいったいいるだろうか。だのに、児童についてとなると、なぜそんなにまで要求するのであるうか。」と詰問している。「訓令」にも、「児童の知的年齢をこえるものでも、力強い感情や普遍的なイデー——それらは詩そのものである——が、やさしい日常的な用語で表現されているような作品であれば、教材に選ぶことができるし、障害もない。」と断定している。しかし、全く理解されないのでは、暗記・朗唱の努力が、学習者にむなししいものと思われるであろう。「やさしい日常的な用語で表現されている」という「訓令」の規定も、児童の理解程度を考慮したうえでのことと思われる。にもかかわらず、一流の作品の意味は必ずしも平易ではあるまい。それなのに、なぜ暗唱指導では、すぐに理解できない詩を多く取り扱うのであろうか。

「訓令」では、「もし子供たちが、聞いたり、朗読したり、暗唱したりする詩句の律動と韻調とを感じるができるならば、言語的、文学

的注釈は多くのばあい余計なものとなる。好響性と重要語句とによって、児童は詩的な思想・感情を直観的にとらえるであろう。読解学習がもつものにちなつて、かれらの感動の無意識的要素をあきらかにする役をになうであろう。」と、理解と鑑賞の問題を位置づけている。理解は将来の読解学習にゆだね、無意識にはあるが、詩の感動に学習の原動力を認めているのである。その感動は詩特有の「律動と諧調」による。「律動と諧調」を有力な手がかりとして作品の鑑賞にむかつていく。記憶化と鑑賞の点からも、暗唱指導の主要教材として、詩が用いられているのである。そのうえ、詩の暗唱は、「律動と諧調」を体感させてくれる故に、「児童にとつて快いものとなる」(「訓令」)効果をもっている。「読み方の授業よりも、唱歌の授業に近い。」とさえ言われているゆえである。「詩は理解されるためにではなく、感得されるために作られている。」とか、「真の詩は子供にさえも受け入れられるものであり、真の詩はしばしば完全な純真さに合致するものである。」¹¹という考えに支えられていることを知るのである。

以上のように詩の教材を考えるとすれば、実際の取り扱いにおいては、作品の部分または全体について、はなはだしい誤解をおかさないように注意すればたりののである。「ユーゴーの詩の20行ばかりを暗記している児童が、その詩句の意味と中心的な感情とをだいたいにおいて捉えているなら、また、朗読がその児童に詩(の行と連)のもつ律動と、母音・子音の類似・対立から生じる諧調とを感じ取らせることができるなら、それだけで十分である。そして、児童はそれらの詩句から貴重な利益を引き出すであろう。やさしくはあるが子供向きの作品から引き出す以上のものを。」¹²は、オヴァン氏

のことばである。

暗唱学習の有効性は以上のものとどまらない。より大きな意義は児童の将来において見出されるであろう。オヴァン氏は、前の文章に続いてつぎのように語っている。「そのうえ、この現在の利益が、期待すべき唯一のものではない。これらの美しい詩句は児童の記憶の中に留まるであろう。もしその詩句をしっかりと捉え、愛好するならば、ずつとちになつて口に出してみたり、それを味わつたりすることがあるであろう。そして、その新しく味わうたびに、進歩した知力と養われた趣味の力によって、それまで了解できなかった意味を詩句の中に発見するであろう。したがって、完全には理解されていない、美しい作品は、知的な潜在力と未来的美的な快楽とを豊富にもつ素材を内蔵しているのである。」¹³と。フランスの文学作品から一流のものを選んで暗唱させる理由と、そこにめざされている学力の特性が明らかに読みとれるのである。眼で読まれるというよりも、耳から聴き、評価してきたという、フランス文学享受の伝統をふりかえり、暗唱学習の未来への有効性を考えると、暗唱指導はすぐれた文学入門の役目をはたしているといえよう。「律動・諧調」という感覚的直観的な面をとおしてではあるが。(この点に関していえば、すぐれた感覚教育、美的教育であり、芸術教育の性格を持つといえる。)

さらに、暗唱指導は美しい作品を習得させるだけでなく、その作品の作者についても学ばせる機会を与えているのである。上級以上の詩・散文教材の作者名をみれば明らかである。文学史学習の導入ともなっている。

要するに、作品の暗唱をとおして、フランス文学の精髓に触れさ

せていこうとする、早期の、しかし、よく準備された文学教育の実践をみるのである。では、それはいかに準備されているであろうか。

四

暗唱学習の指導過程は二つに大別することができる。時間的にみて、前半と後半とに分けられる。前半での指導は、冒頭に紹介したように、教材の分析がおこなわれる。主として教師が活躍し、児童は理解と鑑賞をもつばらにするのである。後半は、児童が主役となつて、暗記してきた作品を全員の前で朗唱する。教師はその朗唱を聞きながら、明瞭な発音・朗読法その他の観点から訂正し、模範を示しつつ、児童の朗唱を真に作品の表現にふさわしいものに仕上げていく。(中級以上にあつては、前・後半それぞれに30分ずつをわけて、一つの詩または抜萃部分を学習する。)

暗唱指導では、この後半が達成すべき表現学習となつているので、この部分に重点が置かれている。しかし、表現学習を成功させるためにも、また、無理のない暗記をさせるためにも、前半での指導は大切であり、それだけに微妙で困難な点があるとされている。前半の30分授業では、教材の提示(教師の範読または暗唱)、作品の解説(韻律をとおして、または重要語句による、テーマ・構成・だいたいの意味・詩法)、児童の朗読、の三つから構成されるのがふつうである。初めに紹介したので、この時間の指導の細目は省略する。「訓令」にも取り扱ひ上の注意が多くみられよう。

後半の30分は、とくに発音・朗読法に注意して指導し、表現学習を徹底させる時間である。この授業の実際については、すでに報告したことがあるので、これも省略することにす。¹⁵

最後に、一度学習された作品を記憶に定着させる復習の問題があ

る。学年始めに教材リストが設定されると同時に、定期的な復習の計画が立てられねばならない。記憶の定着化は反復学習にあるとされているから。しかし、反復だけでよいであろうか。アランは、「記憶印象は再構成によつて固定する。」と指摘している。つぎつぎと美しい詩・散文を記憶させ、それを「再構成」させる復習は、また、たんなる反復だけでは不十分であろう。新しく記憶する作品によつて、文学表現の美にさらに一段と鋭敏になつていく学習をおして、はじめて真に有効な「再構成」が成就されるはずである。段階的な詩の美しさの発見と結びついた復習計画が肝要な問題と考へられているのである。

五

「作品を暗唱するとは、生命の動きと熱と色彩とでもつて作品を生かすことであり、語本来の意味において、作品が内包するものすべてを表現することである。」と、シャルドン氏は定義する。暗唱指導はたんなる受容・詰め込みでないことは、以上、みてきたとおりである。理解への配慮は十分に払われているのであるが、発表・表現の学習指導とさえないであろう。

読み方学習においても、「表現読み」は実行されているが、暗唱学習では記憶化の作業が加わり、定着度がいっそう増大するので、フランス語のすぐれた表現・言いまわしをさらに一段と確実に習得させることができる。読み方よりも集中度が高いといえる。したがつて、アランも「わたしは、目と手とによる勉強に、暗唱という古来の練習をつけ加えたい。」と希望している。

アランは読けて、「この際の暗唱は発声器官の一つの体操として

用いられるわけだ。」とつけ加えているように、暗唱学習は、発音・発声の学習でもある。朗読法に注意する学習はそのまま話し方の学習に結びつく。

暗唱は、以上のように、さまざまな成果をもたらす学習である。読み方・話し方・語彙にとどまらず、フランス語の教育全般に有益であるとされている。さらに、記憶力の鍛練を経つと、とくに、真の美しさ・美的感動へのすぐれた導入となっていることは繰り返すまでもないであろう。「読み方以上であることはもちろんのこと、絵画、音楽以上にも、児童の芸術入門をはたすのは、暗唱によってである。」とさえいわれている。

しかし、シャルドン氏によれば、暗唱の意義はそれにとどまらないのである。「芸術の入門である暗唱は、趣味や美的感受性を形成するものである。しかし、それでもなおその意義のわずかしか触れていない。事実、暗唱は芸術に属している。暗唱する者は、作家の思想に分け入っていくにつれて、その作家の靈感を自分のものとし、創造的な感動を再現していく。すぐれた朗読、すぐれた暗唱はいうまでもなく、聴き手に作品の輪郭とともにその陰影を感じ取らせるのである。このことは、ベルグソンのことばにしたがえば、ある程度まで作品を再創造することなのである。」教育の最も高い目標が、ここに語られているように。

暗唱教材として、フランス文学の傑作を網羅し、それを生きた姿で学習することは、とりもなおさず、フランス文化の精髓で教育されることであろう。すぐれた伝統を直接的感覚的に伝承する意味においても、また、語義の解釈よりも精神の覚醒に目的を置く教育の意義からみても、暗唱指導が、もっとも重要な教育の一つに属する

ことは疑いえない。そして、つぎのようなアランの思想がフランス人のあいだで同意と称賛を得ている以上、古来からの伝統的な暗唱指導は、改良されつつも、変わりなく支持され、継承されていくことであろう。ここには、今まで述べてきた暗唱指導の真髓が力説されているのだから。

「詩は人間の秩序の鍵であり、しばしば言ったように、魂の鏡である。しかし詩といっても、子供用にとくに書かれたばかげた詩ではなくて、反対にもっとも高尚な、もっとも尊重されるべき詩である。この点について、子供ではわからないだろうとよく言われる。疑いもなく、子供には最初はわからないだろう。しかし詩の力というものは、それを読むたびごとに、われわれを教えるに先だって、まず音とリズムとによって、われわれを普遍的人間のモデルに従うようにしむけていくという点にある。そしてこれは子供にもよいことであり、否とくに子供によいことなのである。子供は、かれが耳にするあの人間の啼き声によって自分の動物的な性質を統制するのでなければ、いったいどうして話すことを学ぶことができるのであろうか。だからかれが念を入れて美しい啼き声を暗唱するようにしてやりたまえ。こうしてこそ、まずかれの情念を統制しながら、あらゆる情念を理解する境地に身をおいて、たちまち感情のところまで、つまりそこから人間の風景の全体が望見できるような観察地点にまで自己を高めることになる。

だが子供はがさつで、野蠻人みたいだね。かれはこうしたことには無関心だね。わたしはこうしたことばをちっとも信じてはいない。偉大な詩は万人に対して力をもっている。もっとも粗野な連中できえももっとも偉大な詩を求めめるものだ。一種の詩であるが救い

なき詩である作り笑いに對抗するにも、偉大な詩はどうしても必要である。だから、できるかぎり万人にあらゆる詩を、そしてできるかぎり人間的なことは与えよ。かかる模倣によって訓練されてい
ない人間ではないのだ。^{注22}」

注1' J. Leif et G. Rustin : Pédagogie spéciale,

L'enseignement du français, Delagrave, 1963 ⑥ La
récitationの項。二三二—二三三頁

注2' L. Leterrier: Programmes Instructions Répartitio
ns mensuelles et hebdomadaires, Hachette, 1965 所収。

注3' 上級・完成級のクラス名は現在は廃止されている。しか
し、法令集にはそのまま残されている。

注4' 中級以上は15分授業を二つ合わせ、二日に30分授業一回と
している。

注5' 注1の論文'をふに、L'enseignement du français,
Bourrelier, 1960のP. Chardonの論文による。

注6' 注2の書物による。

注7' A. Aubin, L'enseignement du français

Bourrelier, 1960.に掲載されている論文による。五九—六〇頁

注8' 同前論文

注9' 注1の論文、二二六頁

注10' 注1の論文、二二三頁

注11' P. Chardon, 前掲論文、六一頁

注12' 13' A. Aubin, 前掲論文、五九頁

注14' 15' 拙稿「フランス初等国語教育—授業参観をとおして

—」(大下学園国語科教育研究会「研究紀要11」昭和41年12月4日)

参照

注16' アラン「教育論」第二十八章、(アラン著作集7、八木晃訳

による。以下同じ)一〇一頁

注17' P. Chardon, 前掲論文、六一頁

注18' 19' 前掲書、第四九章、一七二頁

注20' 注1の論文、二一九頁

注21' P. Chardon, 前掲論文、七二頁

注22' 前掲書、第十九章、六八—六九頁

(昭和43年1月23日稿)

(大阪教育大学講師)